

R-18  
For Adult only

# Photogenic!

『My Little Sister Can't Be This Cute』 Fan Book.  
Although she is very lovely and attractive, she is a nerd.  
2010 winter produced by CuteAHermit and medium passion.



# Photogenic!

**『My Little Sister Can't Be This Cute』 Fan Book.  
Although she is very lovely and attractive, she is a nerd.  
2010 winter produced by CuteAHermit and medium passion.**

らめえ…しゅごいのお！  
熱いの奥にあたつてるう！

カチ

カチ

カチ

カチ

そんなにぎゅっとしたら  
またイッチャウのおお！



桐乃に突きつけられた美少女ゲームを  
プレイし始めてかれこれ三十八時間…

イラ

まともに攻略できたキャラと言えば

超絶に鬼畜なデカ乳悪魔のみ…

どうしてマコウなった！

イラ

イラ  
ぐぐぐ…

はあ!?

なんで妹ゲーやって  
妹攻略できないのよ!

シネツ

いや、こういうの  
慣れてないからさ

初心者には  
やっぱ難しいぜ?

メインのキャラクター  
二人しかいないのに

普通にやってるだけでも  
クリアできるはず…

あ!

聞きたいんだけど  
ゲーム中の選択肢で

「蹴飛ばす」「叩く」  
っていうワードに  
心当たり無いかしら?

は!?

なにそれ!  
信じらんない!

そりやあ…妹には  
ちゃんと仕付けを…

こいつに聞いたのが  
大間違いだった…  
こうなったら  
自力でやってやるツ!



この前のゲーム  
なんだけどもさあ…  
やつとヒロインを

ガチャ



翌日

桐乃っ！

うわあああああ  
あああああつ！

桐乃っ！



で……一体  
なんなの？

そうだった！

この前の美少女ゲーム  
やつとクリアしたぞ！



ちよつと！  
ノックくらい  
しなさいよ！

だとしても…全力で  
物を投げつけるのも  
どうかと思うぞ…



いやあ、あの本編の  
シナリオは良かった！  
中盤の部分

いやあ…まさか  
あんな展開になるとは  
思わなかったぜ…

あくそうだな  
実際プレイしてみて  
思ったんだけどさ…



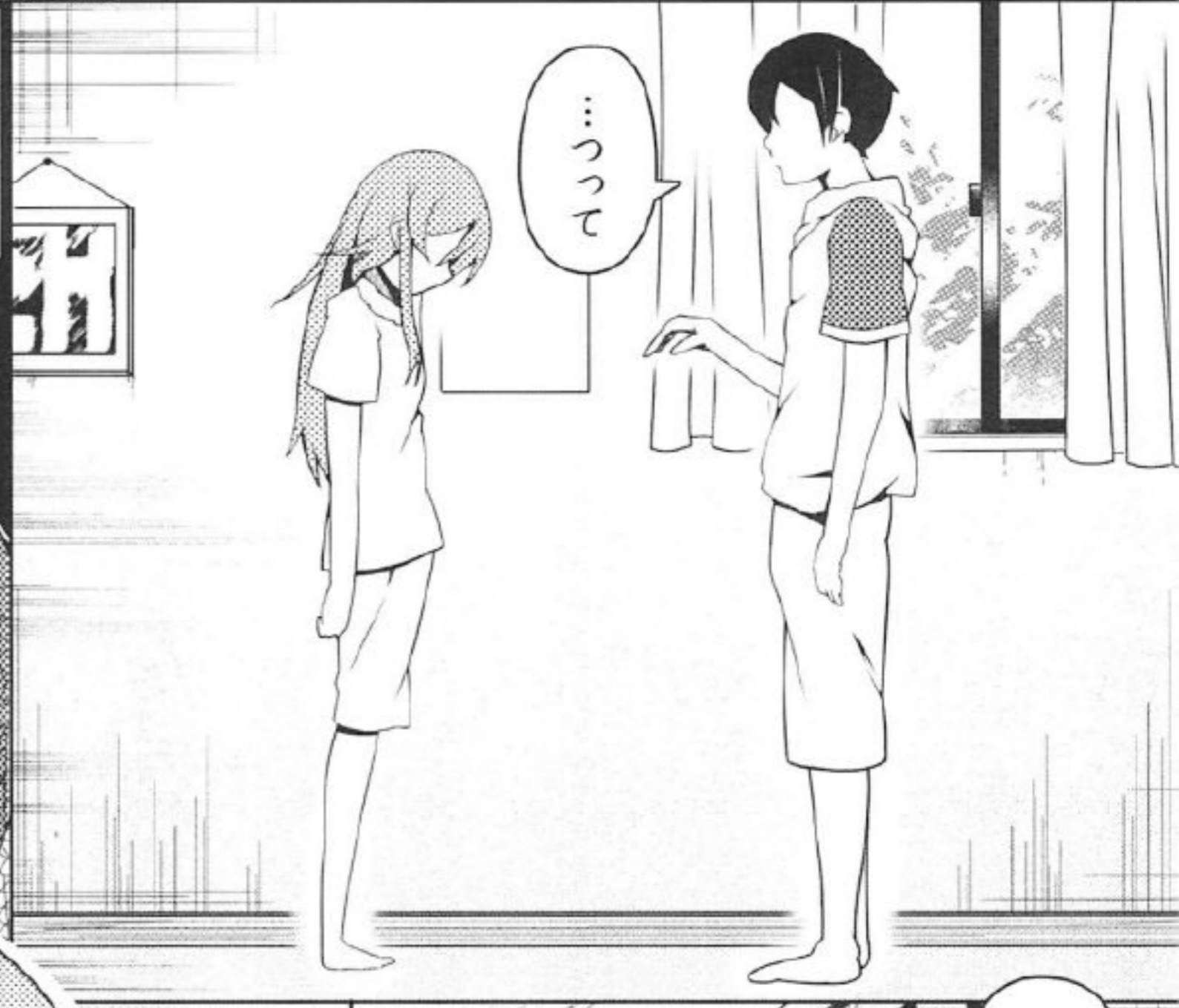
!

妹も悪くないかなあ  
なんて思ってみたり



あ…あれ?

俺…もしかして  
なんかヤバイ事  
言っちゃったか!?



…つって



ほえ…

はあ…?!

あんながそういうのが  
良いって言うのなら  
あたしのこと…  
好きにさせてあげる

そう……わかった  
あたしにも責任があるし  
良いアイデアがあるわ

ねえ…  
私のせいでロリコンに  
なっちゃった…  
そう言いたい訳?

だから  
察しなさいよー！

私が相手してあげるから  
他の女をみるなっつてんの！

は!!?



なっ…なによ  
あたしの身体に  
魅力がないっての!?

そんなこと  
誰も言っていない  
でござる…

まてまて…

流石に妹の裸見て  
欲情する兄貴なんか  
現実いないだろ……



早く出しなさいよ  
どうせ妹の裸みて  
勃起してるんでしょ

キモッ

…ってか  
人の話聞けよ!

はあ?

なんであんなのココ  
大きくなってないのよ!

でろっ

兄が妹の裸みて  
勃起してたら  
おかしいだろ!

ガッ  
ガッガッガッ

お…おい

仕方ないから

あたしがおつきく  
してあげる…んっ

あふっ…

ふう

妹にフェラチオされて  
こんなになって  
やっぱ変態なのね…

ガッ

…ッ

う…あッ!

んっ

えっ…?  
んくッ!

ぎ…桐乃さん  
ちよ…ちよつと







ああっ  
もう…  
我慢できねえ

あひっ?



んくっ…  
えふっ

ッ…  
お前…

げほっ…



あ…熱いのが  
なかに入ってくる!



え…?  
うそっ…  
ちよつと

ちよつと  
待って…

まだ心の準備が  
つ…あああつ!





あんなの事

ねえ…兄貴  
あたしさ…



はじめて。くらはと申します。

時代の流れにのって、俺妹本なるものを作ってみました。  
今回せんに時間が取れなかった事もあって  
漫画少なめですが…正直これが限界でした。  
せんはこんはで、妹が兄貴と“卵”する内容の同人誌なんですが  
せりあえすこれだけは言える！！  
…顔似せるの難しかったです(´;ω;`)

桐乃ちゃん可愛いですよね！

「もう！お兄ちゃんのことなんて、知らなはんだから！」

…なんて

せんは台詞は間違っても言わなは、せんでもはははヒロインでした。  
はやらしと可愛いです。

頭はでましたらづち切れなはですよね！わかります！

正直、今回の登場人物でのダークホースは京介氏だと思はします。

妹の為に何かしら行動をしたと思はたら

次のシーンで土下座はが…。すごと身体張ってますよね。

たまにちょっと度が過ぎて変態扱はになっちゃはますけど  
せうはく所が面白は主人公でもありました。

唐突ですが…

最近、ツイッターはくものにハマってます。

せうです。世界中の人の個人の情報を見たり

ネジが外れた変態せんはコミュニケーションを取れるツールです。

せっきも外人せんに「君はビッチか？」って言われました。

はやはや凄はツールが普及しましたね。

せんは自分もただの会話ツールでしか使ってははは気が…。

ある日曜日のこと、目の前には黒髪の美少女が二人。

色白で小柄なゴスロリ風の衣装を着たのは黒猫。俺と桐乃のオタク友達。

もう一人、長い髪と笑顔が素敵な美少女は新垣あやせ。こっちは桐乃の親友だ。

黒猫とあやせ。ありえない組み合わせの二人が仲良くアニメを鑑賞している。

しかも俺の部屋で、だ。ちよつと信じられないだろ？

どうしてこんな事になっているのか？ 事の次第はこうだ……

夏コミでの事件の後、一時はどうなることかと思つた桐乃とあやせの仲もどうにか元に戻つたようで俺にもようやく平穏な日々が戻つてきた。とりあえず桐乃の人生相談とやらもひと段落したつてわけだ。

そんなある日のこと、あやせからこんな相談を受けたんだ。

「桐乃の趣味のことをもつと理解したいんでお兄さんに協力して欲しいんです。」

素敵な笑顔で相談を持ちかけてきたけど、断れば命は無いららう。そういう奴だ

「おう、任せとけ 桐乃のオタク趣味のこと俺がバツチり教えてやるよ！」

どうせ逃げられないんだ、最高に爽やかに答えてやったよ

あとは分かるよな？ 性懲りもなく俺はまた厄介事に首を突っ込むハメになったんだ

「あと……桐乃には内緒にしたいんで……できればお兄さんと二人つきりで……」

えええええええ、何だ？ これがフラグつてやつなのか？

「お兄さん、何ブツブツ言ってるんですか？ あんまり気持ち悪いと通報しますよ」

「あ、悪い悪い ちよつと考え事してたわ」

「もう……真面目な話なんですから、ちやんと聞いてくださいよね」

落ち着け。よく考えろよ……エロゲーなら選択肢が出てくるような場面だぞ

ここで間違えばあやせルートへの道は断たれちまうぞ……慎重にいかないと

「じゃあ、桐乃が留守の時にでもウチに来いよ。とりあえず、実際にアニメとか見てみない

と話にならないしなっ」

「えーつと……ちよつと待ってくださいね」

あやせは肩に下げている鞆からスケジュール帳を取り出しページをめくっていく

さて、どーなるか……結構、自然な感じで誘えた気がするぞ

「それじゃあ……来週の日曜日、ちよつどわたしはオフで桐乃は雑誌の撮影があるみたい

んでその日にお伺いしますねっ」

よおおおし、選択肢あつてた。

もうどんな厄介事でも解決してやろうじゃねえか

この機会にあやせと仲良くなれるんなら安いもんだ。

家に帰つてからも俺はそわそわしていた。妹の友達とはいえあんな美少女が俺の家に来るんだぜ？ しかも家には二人つきり、期待しない方がどうかしてると思うよ。

が、そこでふと気づく

「……俺、アニメのこととか人に教えられるほど詳しくないよな？」

この数ヶ月間、桐乃の人生相談とやらにつき合つて無理矢理ながらも色々やってはきたんだ。でも、アニメについて言えばほとんど知識がないんだよな

だからつて、あやせと二人でエロゲーやるわけにもいかんし……俺だつてこれ以上あやせ

に嫌われたくない

糞つ、どうしろつてんだよ？ 部屋をうろろしながらあれこれ考えてみるが俺にはどう

しようもなさそうだ。

「仕方ないな……あいつらに助けをもらうか」

俺はあやせと二人つきりの休日を諦めて、いつもの二人に助けを求める事にしたんだ。

と、まあこういうわけで迎えた今日の朝。

桐乃が撮影に出かけた後、俺は部屋を掃除して来客を迎える準備を整えた。幸い親父もお

袋も朝からどこかに出かけてるみたいで家には俺しか居ない。あいつらを呼ぶには都合合っ

てわけだ。

念のために言つとくが、別にやましい意味じゃないからな。

俺が助けを求めたいいつもの二人も快く引き受けてくれ、あやせのために色々グッズを持っ

てきてくれるらしい。

もちろん、エロいのは無しだ。今日は一日、清楚でおしとやかなラブリーマイエンジェル

あやせさんのままで居て欲しいからな……こないだみたいなのはもう勘弁して欲しい

「……お邪魔するわ」

「お邪魔するでござるよー」

準備が整つたところで黒猫と沙織がやつてきた。二人とも両手にいくつも紙袋を下げてい

る

「わざわざすまないな……」

「なあに、京介氏の頼みとあらば喜んでお手伝いするでござるよ」

「あの女の親友というのが気に入らないけれど……引き受けてしまった以上、できる限りの

ことはさせてもらうわ」

何だかんだ言いながらも休日潰してまで来てくれたんだ、感謝しないと。本当にこい

つらには世話になつてばかりだな

二人には先に俺の部屋に行ってもらい、俺は台所で飲み物と適当なお菓子を見繕う。二人とも遠慮していたがわざわざ来てくれたんだ、これくらいはさせて欲しい。

部屋に上がってみると二人は早速グッズを広げていた。DVDにマンガ、設定資料集……この、やけに分厚い同人誌はこないだ黒猫が書いたやつか

「それにしても黒猫が持ってきたのはマスケラのグッズばかりなんだな」

「当たり前よ。どうせ見るなら高尚なアニメの方がいいに決まってるわ。他にも一応、シスカリを持ってきたわ」

「おいおい、シスカリってエロゲーじゃねえか！」

そう。シスカリとは俺がこないだまで桐乃に無理矢理やらされていたエロゲーだ。

といつても、よくあるテキスト形式の部分よりもアクション要素が多くて半ば格ゲーみたいなもんなんだが……エロゲーだけあって女の子キャラが裸に剥かれちゃったりするわけだ……女子中学生に勧めるのはマズい気がする

「流石にマズくないか？ 相手は中学生だぞ？」

桐乃も中学生なんだがそれはこの際、置いておこう

とにかくエロはマズい。あやせに通報されかねん

「大丈夫よ。PSP版だからエロはカットされてるわ。第一、あなたの妹じゃあるまいし、いきなりエロゲーなんて勧めたら引いてしまうでしょうに……」

慌てる俺を見かねてか、黒猫が呆れたように言う。

「そういえば夏コミの列に並んでいた時に桐乃がPSPでやってたのを見た気がする

「シスカリは拙者も本体と一緒に持ってきております故、二台で対戦もできますぞ」

「おー、流石は沙織だ。準備がいいなっ」

「ふふっ、抜かりはないでござるよ」

得意げな顔をしていた沙織だったが、ふと何かを思い出したように表情を変えた。

「そういえば、あやせ氏はきりりん氏のお友達だというお話でしたが……」

「ああ、そうだな。桐乃の親友だ。学校でもモデルの仕事でも仲が良いみたいだぞ？」

いつも一緒にいるんだろうな。二人とも見た目だけはいいから一緒にいれば、さぞ目立つことだろう

「うーん、でしたらメルルのグッズなどを持参した方が良かったかもしれませぬ……その方がきりりん氏との共通の話題が増えるでしょうし」

「——いいのよ、これで」

沙織の言葉を遮るように黒猫が口を挟む

ちなみにメルルとは桐乃がハマっている『星くず☆ういちメルル』ってアニメのことだ。

「メルルのような低俗な子供向けアニメよりもマスケラの方が受け入れ易いと思うわ……普通の感覚の人間ならね」

自信満々なオイ……

「それに……上手くハマってくればあの女の悔しがるどころが見られるわ」

口元に薄く笑みを浮かべ嬉しそうに語る黒猫。

つまりアレだろう？ 桐乃よりも先に手を打って、あやせをマスケラ派に引き込んでやろうってわけなんだろう

そりゃあ、桐乃も悔しがらるだろうよ。相変わらず酷え性格してやがる……

「しかし、そんなに上手くいくもんかねえ？ もしかしたらあやせもメルルみたく可愛い感じのキャラの方が好みかもしれないぜ？」

「クク……何の能力も持たない人間を闇に染めるなど、我が魔眼をもってすれば造作もないことよ」

特に秘策とかがあるわけじゃないんだ……

色々心配になってきたが、とりあえずその魔眼とやらに期待してみることにしよう

目的はどうあれ、俺からすれば要はあやせがアニメに対する偏見を無くしてくれればそれでいい……上手くすればこれを機会にあやせと話せる機会も増えるかもしれないな

まあ、こうしてようやくあやせを迎えたんだ。

「はじめまして。新垣あやせです。今日は一日よろしくお願ひします。」

そう言っただけとお辞儀をするあやせ

落ち着いた優雅な動作から育ちの良さが伺える。ああ、やっぱりあやせさんはこうじゃな

いとな……

「拙者は沙織・バジーナでござるよ。沙織と呼んでくれればいいでござる」

「黒猫よ……よろしく」

「沙織さんに黒猫さんですね。わたしのこともあやせって呼んでくださいわね」

につこりと微笑むあやせ

ああヤバイ、可愛い。ホント大人しいときは天使だな

……くいくい

「ん……？」

振り向くと黒猫が俺の服の袖を掴んで引っ張っていた。

「何か言いたそうにしてるので黒猫の方に顔を近づける。」

「ちよつと、モデルをしているとは聞いていたけれどこんな絵に描いたようなりア充つぽいのが来るなんて聞いていないわよ……」

黒猫は恨めしそうに俺を睨みながら小声で呟いた。

「あー、黒猫の苦手なタイプなのか？ あやせは人当たりがいい奴だから人見知りする黒猫でも大丈夫だと思うんだがなあ」

「では、さつそく始めますぞ！」

黒猫を安心させてやろうと思っただが、俺の声は沙織の大声にかき消されてしまった。

沙織のやつは誰が来ようとお構いなしなんだな

「はあ……仕方ないわね」

黒猫も観念したのか持参したマスクラのDVDを取り出し準備を手伝い始めた。

「本来なら最後まで通して見るものなんでござるが、今回は時間もありませんので黒猫氏のお勧めのシーンを中心に見ていこうと考えているのでござるが……」

「そうね、本当は見なくてもいいシーンなんて無いのだけれど……」

黒猫はやつぱり少し不満なようだ。そりやそうだよな、お気に入りの作品なんだから最初から最後まできつちりあやせに見せてやりたいに決まってる

「それはそうなんでござるが、そこは作品の魅力を知り尽くした黒猫氏の解説でカバーしていただきたいんでござるよ」

「……そこまで言うなら仕方ないわね」

不満そうに答える黒猫だったが内心はノリノリみたいだ。その証拠にノーパソの画面の横を陣取って設定資料を広げ始めている。ナイスフオローだったな、沙織。

「拙者もマスクラにはあまり詳しくありませんが、今日はあやせ氏、京介氏と一緒に鑑賞させてもらおうでござるよ」

「ええ、そこで大人しく私の解説を聞いていなさい」

オープニングを見ながら黒猫があやせに解説している。

作画がどうか、演出がどうか、このシーンは後半の展開を暗喩しているのだとか正直、俺にはさつぱりな話だったがあやせは真剣な眼差しで画面を見つめている。

「最近のアニメって意外と凝った内容なんですわ、アニメってもっと子供向けな内容だと思っ  
てました」

「ええ、そうよ。ちゃんと、子供向けの内容の作品もあるのだけれど……それもハマっているのは大抵、いい歳した大人ね」

「そういう人達はちよつと怖いですね……」

『そういう人達』の中にお前の親友も入ってるんだがな……とは思ったが、流石に口には出せなかった

「そういうええ、桐乃も好きなんですか？ このアニメ」

「そうね。この間、見せたら絶賛していたわ」

「わあ、桐乃に作品のこと話したら驚いてくれるかな？ うふふつ」

口元を押さえ嬉しそうに微笑むあやせ。何だか幸せそうだ。

それにしても、黒猫のやつ表情一つ変えずに嘔吐きやがった……後で面倒なことになって俺は知らないからな

「あ、黒猫さんが今日着てるのってこのキャラクターの衣装なんですわ コスプレ……って言うんでしたっけ？」

「ええ、そうよ……人間にしてはなかなかの観察眼ね」

「うふふ、とつてもよく似合ってますよ」

「……つ、こ、ここからいいシーンなんだから画面のほうに集中しなさいよ」

黒猫の熱い解説の甲斐あつてか、あやせもマスクラが気に入ったようときどき黒猫と話したりしながら楽しそうに見ているようだ。

「いやあ、黒猫氏とあやせ氏もすっかり打ち解けたようで微笑ましい限りでござるなあ」

「ああ、俺もあいつらの相性がこんなには思わなかった」

初めは嫌がっていた黒猫もあやせの人当たりの良さも手伝ってか普段どおりに話せるようになっていた。まあ自分の好きなアニメの話だからってのが一番大きいんだろうがな

「黒猫氏もきりりん氏とよく似たところがありませんか。それで気が合うのやもしれません」

「でも、桐乃の奴、学校とか仕事の友達の前では全然違うキャラだぜ？」

「たとえキャラを作つていても別の人間になるわけではござらん。本質的な部分は案外変わらないものでござるよ」

「そういうもんなのか？」

「もつとも、こんなキャラで通している拙者がこんなことを言うのもおかしい話でござるがな。はっはっはっ」

分厚いメガネのせいで表情はよく分からなかったが沙織の言葉には妙な説得力がある。そういえばこいつのキモオタっぽい言動もキャラ作りしたものだったな。すっかり見慣れちまって忘れてたわ

……いずれこいつの素のキャラも見せてもらいたいもんだ



「さて……と、私はそろそろ御暇しようかしら」

「あれ？ もう帰っちゃうのか？」

アニメを一通り見終わってシスカリにも飽きたころ黒猫がいそいそと帰り支度を始めた。外は日が暮れ始めたころで帰るにはまだ早い気もするんだが

「もう一戦、もう一戦だけお願いします。黒猫さんっ！」

対戦で黒猫に負け続けたあやせが懲りずに再戦を申し出る。

「こいつも負けず嫌いだなあ……」

「残念だけれど、そろそろ家に帰って夕食……いえ、今宵の儀式の供物を用意しなくてはならないのよ」

「では、拙者もこの後で用事があります故、これにて」

「そうですか……お二人とも忙しいのにわざわざすみませんでした」

「気にすることはないわ 私も、その……楽しかったから」

「ほほお、黒猫氏。今日はえらく素直でござるな」

「う、うるさいわね……ほら、もう行くわよ」

微かに顔を赤らめながら黒猫は乱暴に言い放つ

期待していた通りの反応だったからか沙織はニヤニヤと嬉しそうだった。

「あ、そうそうマスケラのDVDは貴方に貸しておいてあげるわ」

「えっ、いいんですか？」

「次までに作品の魅力を話れるくらいになっていることを期待しているわ」

「はい、桐乃のためにも頑張りますっ」

こうして鑑賞会は無事終了したんだ。

「どうだ？ 少しは参考になったか？」

「はい、色々教わりましたし、お二人ともいい人でとっても楽しかったです」

「そっか、それなら良かったよ」

ひとまず喜んでくれたようで安心するが、ここで会話が途切れてしまう。

図らずも二人つきりになれたんだけど、あやせを意識してしまっただけにも落ち着かない。

こりやあ、黒猫と沙織を呼んどいて正解だったのかもな、こんなに緊張するもんだとは

「あの……お兄さん」

俯きがちに、こちらを見つめてくるあやせ

ああああああ、くそ可愛いじゃねえか……

「今日は、わたしの為ありがとうございます」

「気にすんなって、それに俺はほとんど何にもしてないしな」

「そんなことないですって、お兄さんのことちよつと見直しましたよ」

「そ、そうか？ なんか照れるな」

こんなに素直に褒められるとは思わなかった。何か調子狂うなあ

「……だから、ご褒美です」

「え？」

目の前にあやせの顔、唇に触れる柔らかな感触、ふつと離れる瞬間に優しい匂いが鼻を撫するあやせが離れた後も、とっさのことで言葉が出てこなかった。

えーつと……キス、されたんだよな？

ドクドクと心臓の音が頭の中に反響する、耳の辺りがカッと熱くなって、目の前のあやせの顔をまともに見ることができなかった。

「お、お、お前って……もしかして、俺のコト、好き……なの？」

「そそそそ、そんなワケないでしょう！ ブチ殺しますよっ！」

「え？」

「妹に欲情するような変態をわたしが好きになるワケないでしょうがっ！」

あれ？ 何か俺、罵倒されてる

「そうですよ、わたしがお兄さんを好きになるなんてありえませんかっ！」

目が泳いでオロオロと混乱した様子で喋るあやせ

いつもの落ち着いた様子とは大違いだ

「ちよつと頼りになってかつこいいかなあなんて思っちゃって……あく、もうっ」

早口で捲し立てながら俺の襟に掴みかかってくる。

そのままガクガクと首を激しく前後に揺さぶられる。

「だ、大体、お兄さんがいけないですよっ！ 会うたびに、可愛いだとか結婚してくれだ

とか言うからわたしも変な勘違いしてあんなコトしちゃったんですよっ！」

だんだんと襟を掴む力が増してゆく。ちよつ……首絞まってるって……

「あ、あやせ落ち着けっ……」

「絶対に好きとか、そういう気持ちじゃないんですからっ！」

「分かった、分かったからとりあえず放してくれ」

俺のヤバそうな顔色に気づいたのか手の力が緩み何とか開放される。

「すみません……ちよつと取り乱してしまいました」

うん、盛大に取り乱してたね……初キスの余韻に浸る間も無く、しかもキスした相手に絞殺されるとか、死んでも死にきれねえよ

「ほら、もうキスもしちゃったことだし結婚しちゃおうぜ」

「もう、ほんとにブチ殺されたいんですか?」

「ぶへあ……っ」

罵倒の言葉とともに容赦ない拳の一撃が俺の頬を捕える。

場を和ませようと言ってみた小粋なジョークも火に油を注いだだけのようだった。

「でも、好きなんだから? 俺のこと」

何でこんな恥ずかしいこと言ってるんだろ……ジンジンと痛む頬が余計に惨めさを演出する

「だから、違いますって!」

くそお……そんなに認めたくないのかよ……ちよつと悲しくなってきたぞ

ここは、ちよつと強引に攻めてみるとするか

キスマで終わったんだ、確実にあやせルートに入ってるはずだから大丈夫だって

俺はなるべく真剣な眼差しであやせを見つめ、こう切り出してみた。

「あやせ……聞いてくれ」

「もう、何なんですか?」

「お前には冗談にしか聞こえなかったかもしれないけど、俺はいつだって真剣なつもりだったんだぜ?」

「えっ……」

「あやせ、大好きだ」

「えつと……それって……きやつ」

ベッドに腰掛けて俯き顔を真っ赤にしていたあやせを抱き寄せる。

首筋に鼻を寄せるとシャンプーの匂いとはまた違った甘い匂いが鼻腔に広がった。

蠱惑的な匂いに頭がぼーつとしてくる。

突然のことに驚いたのかあやせは俺に為されるがままになっている。

ふと顔を上げてみるとあやせが固く目を閉じて小さな唇をツンと前に突き出している。

控えめながらも懸命にキスをねだる姿に俺の理性はもう耐え切れなかった。

淡いピンクの薄く整った唇にそつと自分の唇を重ねる

「んっ……ちゅ……」

やさしく、軽く、啄ばむように何度も唇を重ねる。

「んんっ……んふうっ……っ」

ゆっくりと、その柔らかな唇を舌で開き奥へと割り入れてみる。

始めは驚いたのか、身を強ばらせたあやせだったが次第にゆっくりと舌を絡ませてきた。

「んんっ……んちゅ……ん……んくっ」

そのまま舌先を動かして俺の唾液を絡めとり喉を鳴らして飲み下していく。

激しいキスで泡立ち、ねつとりと唾液を含んだ唇を離すとヌラヌラと光る唾液が二人の唇の間にいやらしく糸を引いた。

「んんっ……ぶはっ、もう……いきなり舌を入れるなんてズルいです……」

うつとりとした目でこちらを見るあやせ。いつもの凛々しい姿はそこには無かった

「あの……さつきからお腹に何か当たってるんですけど」

「えっ?」

驚いてあやせから体を離すと俺の下半身は臨戦態勢に移行していた。

まあ、詰まるところのフルボッキってやつだ

「……」

怖いもの見たさといった表情でまじまじとそれを見つめるあやせ。服の上からとはいえず

ぱり恥ずかしい……

「あのお……コレは一体……?」

「まあ、なんだ あやせのキスがあんまり激しいもんだからつい」

「あ、あれはお兄さんが勝手に……」

「嫌だったか?」

「そういうわけではないですけど……」

目をそらし、俯きながらそつと自分の唇を指でなぞるあやせ。

やっぱり気になるのかチラチラと俺の下半身を横目で見つめている。

「さ、触ってみてもいいですか……?」

「お、おう」

あく、もうここまで来たら引き返せない。あとはどうにでもなれた

チャックを下ろして下を脱ぐと、ギンギンになった肉棒が勢いよく飛び出した。

「きやつ、ちよつと何でいきなり脱いでるんですか!」

「いや、触りたいって言うからさ……」

「もう……」

文句を言いながらも、恐る恐るといった感じでそれに触れるあやせ。細く柔らかな指が肉棒を

優しく包む

「へ、へえ……こんなに硬いものなんですね」

握ったり、動かしたりときこちない動作で肉棒が刺激される

腕を動かすたびに揺れるあやせの胸が気になってしょうがない。

「その……あやせのも見たいんだけど……ダメ?」

「えっ!」

突然の申し出にひどく驚いた様子だったがしぶしぶと了承してくれた。

焦る心を鎮めつつ、丁寧に上着を脱がしていく。恥ずかしそうに俺を見つめるあやせの姿はいつもと違ってとてもか弱く、可愛らしく見えた。

上着を脱がし終わり、遂に下着までたどり着いた。夢にまで見たあやせの胸はもう目前だ。

「は、恥ずかしいですね……」

「いや、俺なんか下半身丸出しだからね」

「や、ちよっと、こっちに向けないでくださいよっ」

肉棒に驚くあやせを無視してブラを脱がせにかかる。

「あれ？ あれっ？ このっ」

勢い勇んだもののホックが上手く外れてくれない

「あ、あの……わたしが外しましょうか？」

「——お願いします」

……黄お、童貞丸出しじゃねえか。エロゲーじゃ外し方まで教えてくれなかったぞ

何ともしよっぱい思い出になってしまった。

露になったあやせの胸は思っていたよりも大きいものだった。

大きいながらも綺麗な形の胸の先には、薄ピンクの突起が控えめに盛り上がっている。

「……あの……あんまり、ジロジロみないでください」

顔を真っ赤にしたあやせが今にも消え入りそうな声で呟く。

「きやっ」

半ば無意識にその大きな胸を両手で鷲掴みにしていた。

「やっ……ちよっと、んっ……おにいっ……さんっ……っ」

あやせの背後に回りこみ、後ろから持ち上げるようにして揉みしだく。

力を入れると指が肉の中にずぶずぶと沈んでいく。それでいて適度な弾力があって心地よい

力で指を押し返してくる。表面はすべすべで暖かく吸い付くような肌触りだ。

するりと指を滑らせ先っぽの突起をコリコリと弄んでみる

「ああんっ……んっ……先っほ、ダメですう……んんっ」

つまんだ瞬間、ピクッと背筋を伸ばし身をくねらせるあやせ。

指を動かすたびに熱い吐息が口から漏れる。

「あ……んふう……んっ……お兄さんっ……コリコリしちゃ、だめえ……っん」

右手で胸への愛撫を続けながら左手を下腹部へと進める。あやせの肌はどこを触ってもすべ

すべと心地よい。

「おにいさんっ……キスっ……んんっ……キスしてっ……っく」

手での愛撫はそのまま、あやせにキスをする。息遣いが荒いためか唾液が泡立って口端からぬらりと垂れてくる

「んん……んちゅ、ぢゅる……んぐっ」

激しく舌を絡ませながらも、スカートの中にまで手を進めていくとうっすらと湿り気を帯びた

布にたどり着いた

クロッチの上から爪の先で固く閉じた割れ目をゆっくりとなぞってみる

「いやあ……んふう……ああん」

下半身の刺激から逃れようとしてかあやせは激しく身をよじらせる。

そうする間にも下着はますます湿り気を帯びていきクロッチに小さな染みが出来てきた。

「いやあ……あんっ……ダメ……です……っん」

はあはあと荒い息遣いのあやせ。さっきまでは快感から逃れようと身をよじっていたが、もう

諦めることにしたのか、だらりと全身の力を抜いてベッドに身を委ねてしまっている。

乱れたスカートの端から可愛らしい下着が顔を覗かせている。これを黙って見過ごしたら男が

腐るってもんだ

ワケの分からない使命感に突き動かされた俺は勢いよくスカートの中に顔を突っ込む。

「きやああああ、ちよ……ちよっと、何やってるんですかっ！」

ジタバタと暴れるあやせの足を押さえつけ、下着に顔を埋めて匂いを堪能する。

どうやら俺は匂いフェチの素質でもあるらしいな……

クロッチの染みに鼻を擦り付けてあやせの秘部から漂う匂いで肺を満たす。

「やん……やめてください……っん、匂い、嗅がないでっ！」

クロッチの上からぶっくりと盛り上がったあやせの割れ目を舌でなぞってみると染み出した愛

液だろうか？ 甘酸っぱい匂いが口の中に広がった。

「やだあ……んっ……そんなトコ……汚いですよ……お」

あやせが身をよじる程に太ももはじつとりと汗ばんでいき、汗と愛液の混じった淫靡な液体で

あやせの下着はドロドロに汚れていった。

「あっ……あうっ……そこ、舐められると……お腹の辺りが、きゅんって……んんっ」

下着の上からの愛撫を続けているとあやせの声に甘い響きが混じるようになってきた。

愛撫のたびに、くねくねと切なそうに腰を揺らす。

「やだ……もう、下着っ……汚れちゃいます」

「じゃあ、脱がしちゃうぞ」

それだけ言うとおやせの下着とスカートを脱がしていく。染みだした愛液が下着だけでなくス

カートにまで黒い染みを作っていた。

下着を取り去ると、あやせのうっすらと毛の生えた秘部が露になった。固く閉じたピンク色の

割れ目からはトロトロした透明の液体が止め処なく溢れている。

「お兄さん……もう、恥ずかしいですよ……」

あやせは両手で顔を覆い隠し顔を真っ赤にして恥ずかしさに耐えているようだ。

テラテラといやらしく光る割れ目の上の方、ツンと立った突起にゆっくりと舌を這わせる。

「ひゃっ……っん、んんっ」

突然の激しい刺激に驚いたのかあやせの身体が跳ねる。

ゆっくりと舌の先で割れ目から溢れる蜜を掬うように舐め取り、突起の先へと絡めていく。

「あん……いやあ……そこ、感じすぎて……っく、んっ」

舌での愛撫を続けるうちにひくひくと動きはじめる。そうしているうちに、くばあといやらしい透明な糸を引きながら割れ目が開いていく。

甘酸っぱい蜜を舐め取りながら開いた腔内へと舌を進入させる。

「あっ、やだっ……舌、だめっ……腔内に入れちゃだめえっ」

舌から逃れようと腰をくねらすあやせだったが腰にうまく力が入らないのか、ささやかな抵抗も無駄に終わったようだ。

異物の侵入を拒むように、ぴったりと閉じていた割れ目もだいぶほぐれてきたようなので、

ゆっくりと人差し指を挿入してみる。

腔内は熱く、ねっとりとした肉が指に絡みついてきた。

「あっ……ひんんっ……」

「痛くないか？」

「ちよっと……びっくり、しましたけど……大丈夫……夫……ですっ」

人差し指を前後に動かすと、きゅっと腔内に締め付けられる。指先を少し曲げ、天井のざらざらした部分を刺激してやるとそのたびにぞわぞわと肉壁が蠢くのが感じられた。

「やんっ……そこ、触られると……やっ……んくっっ」

愛撫が続いているとあやせの声に甘い響きが混じるようになってきた。

最初は逃れようとしていたようだったが、今は指の動きに合わせてくねくねと切なそうに腰を上下に揺らしている。

「お兄さんっ、触れられるだけじゃ……んっ……切ないですっ」

「あやせはどうして欲しいんだ？」

「んっ……お兄さん……最後までして……欲しいです……っん」

「でも、いいの？ 初めての相手が俺で」

「いいのっ……お兄さんじゃなきゃ、嫌なのっ……わたしの初めてっ……んくっ……もらっ

てくだしいいっっ」

「じゃあ、入れるぞ」

「はい……やさしく、してくださいね」

秘部から指を引き抜き、肉棒に手を添えてゆっくりとあやせの割れ目へと導いていく。

入り口の辺りに肉棒の先を押し当て、上下に擦り付け愛撫する。時々、肉棒が肉芽に触れるとあやせの体がビクンと跳ねる。

「そんなっ……そこっ、クリクリされたらっ……んくっ、んっ」

ぬるぬると溢れる蜜を肉棒と肉芽に塗りたくりながら愛撫を続ける。

そろそろ大丈夫だろう、ゆっくりと肉棒をあやせの腔内へと進めていった。

先が入り口に入ると、熱い腔内の肉がぞわぞわと動いて肉棒に絡みついてくる。

「あっ……ひくっ……あああ……っ……ああんっ」

再び、ゆっくりと腰を進めると肉の中へぬぶりと肉棒が吸い込まれていった。

熱い肉壁が蠢き奥へ奥へと肉棒を導いていく。その動きに合わせて腰を動かすと急に壁が狭く

なった。痛いのは一瞬の方がいいだろうと思い、その壁を一気に貫く。

「いいっ……っっ……っく、んっんんんっ……」

奥まで一気に貫くと、あやせが苦しそうな悲鳴を上げる。

「痛かったら止めるから、無理はするなよ」

「あっ……んんんっ……大丈夫、ですっ……このまま、最後まで……っく」

「無理するなって」

一度、腔内で動きを止めてやさしくキスをする。

「んじゅ……ぢゆる……んちゅ……んっ」

あやせは俺の舌に自分の舌を絡ませ、渴きを癒すかのように唾液を吸っていく。

少し痛みが和らいだのか苦しげな表情は消えていた。

「もう、大丈夫……です、から」

「痛かったら、無理せず言うんだぞ」

「ふふっ……お兄さん、こんな時まで優しいんですね」

そんなあやせが愛おしくてそつと髪を撫でてやる。

「じゃあ、動くからな」

「はい……私の腔内で、お兄さんも気持ちよくなってくださいね」

ゆっくりと腰を前後に動かす。前後に動かすたびに、カリの辺りが腔内を引っかくように肉壁

絡み付いてくる。

「あんっ……お兄さんのがっ、腔内でこすれて……っん、っく」

そのまま、少し腰を落として天井のざらざらとした部分に龟头を擦り付けてみるときゆうきゆうと腔内

が締め付けられる。

うと腔内が締め付けられる。

「あんっ……そこっ、」りっでされると……んっ……ああっ」

だんだんと良くなってきたのかあやせも腰を動かし始め、だんだん動きが激しくなっていく  
接合部のぶつかる音とあやせの甘い喘ぎだけが部屋の中に響いていた。

「あんっ……膣内がっ……あつ、熱くて、蕩けちゃいそう……っんん」

腰の動きを強めながらあやせの胸の先、ピンと尖った乳首を舌で愛撫する。

「いっ……やっ、おっぱい……ダメえっ、先っほココロココロしちゃダメえっ」

激しい快感から逃れるように頭を左右に振り乱すあやせ。

頭を振り、髪が舞うたびにふわりと甘い上品な香りが辺りに広がった。

そのまま口に含んだ突起を優しく甘噛みしてやると、背筋ををピンと伸ばし膣内の締りがい  
っそう強まった。

「んっ、んんっ……だめっ、おっぱい嗜んじやだめっ……刺激っ、っよすぎるのお……っ」

口の端から涎を垂らしながら喘ぐあやせ。

動きたびに長い黒髪が暴れて、しなやかな鞭のようにその裸体を叩く。

あやせの上に覆いかぶさるようにのしかかり、正常位のまま激しく肉壁を抉り肉棒を穴の奥  
の方、子宮の先へと龟头を打ち付ける。

「あつ、あつ……あう……」

「痛くないか？ あやせ」

「んっ……っ、気持ちいいれすっ……奥が……っん、コツコツって」

「お兄さんはっ……っわらひの膣内っ……気持ちっ、いいれすか？」

快感で呂律が回らなくなったのか、舌って足らずな声であやせはなんとか言葉を紡ぐ。

「ああ、お前の膣内とっても気持ちいいぞっ、あやせ」

「よかった……っん……わたしもっ、んんっ……お兄さんの、気持ちいですっ……っ」

あやせは足を俺の腰にぎゅっと回してがっちりと俺の身体を固定する。

「あんっ……あつ、お腹……上のほう、当たって、っゴリゴリされてるう……っん」

いきそうなのかあやせは膣内の締め付けをさらに強めてくる。

愛液はさらに量を増しめめめと肉棒を包んでいき、ねっとりとした膣肉の壁はさらに熱さを  
増して肉棒を攻める。味わったことのない快感に腰から下が溶けてしまいそうだ。

「このペースで攻められたら、もうそろそろ限界が近い。」

「あやせ、俺そろそろいきそうだった」

「んっ……一緒に、膣内につ……っん……お兄さんの熱いのっ、全部、膣内にくださいっ」

ラストスパートとばかりに腰の動きを早めていく。

「あんっ……ああああああ、ひあんんっっっんんんん」

あやせの絶頂と同時に俺も膣内にたっぷりと精を吐き出した。

肉棒を引き抜くと白く泡立った蜜とともに、精液と破瓜の血の混じったピンク色の濁りがどぶ  
りと流れ出てベッドのシーツを汚した。

「うう……まだ、ちよつと痛いです」

お互いに服を着終わった後、あやせは浮かない顔でぼやいていた。

「それに、お兄さんっ、中に出したでしょう、どうしてくれるんですかっ？」

「いやー、それはお前が中に出せて言うから……」

「しっかり責任とってもらいますからねっ！」

そう言つて、ぎゅつと抱きついてくるあやせ。

何か変わったな、こいつ

「それより、さ……」

俺は気になっていたことを確かめてみることにした

「順番が逆になっちまったけど、俺と付き合ってくれないか？」

「えーつと、彼女になれてることですか？」

「まあ、そういうコトだな」

「お断りします」

ええええええええええええ！ まさかここでフラれるのか思ってたよ？

落ち込む俺を見ながらあやせはニコニコと言葉が続ける。

「彼女じゃなくて、責任取つてお嫁さんにしてもらうんですからっ」

「え？」

「覚悟してくださいね、京介さんっ」

とつさに何か言いかけたが、俺の言葉はあやせの唇に遮られてしまった。

柔らかい唇の感触を感じながら、そつとあやせを抱きしめる。

やれやれ、桐乃に何て説明すりやいいんだよ……

手に入れた幸せを感じながら、ベッドエンドの予感に背筋が寒くなるのであった。

領収証

# Photogenic!

B side なずみ けい 菜澄 桂



# スーパーモデル



# シンクロ率





視えるわ：  
煮えたぎる憎悪の念が  
私めがけて湧き上がってゆく



はあ……  
沙織が沢庵をねえ……  
……たくあん……？



否  
如何な念を持つてしても  
そこから抜け出すことは不可能  
私に一太刀浴びせることすら  
叶わず儂く消えてゆく……  
それが世界の理……



あなたたち費の慟哭が  
この耳に届くのは  
いつになるのかしらね……



おい……もしかして  
親父が食ってたのって  
△キのまゆ——  
どうした京介？



……もう少しの辛抱よ  
ねえさま  
カレーまだです？





おーい桐乃

俺の評価を  
教えてくれねーか？

女のころ



エロゲーのHシーン  
真っ最中だった▲

アンタ、いくらゲームだからって  
乙女の部屋にノックも無しって  
どういう神経してるワケ？

いっぺん白い壁の病院で  
そのアタマ診てもらえば？  
てか死ぬば？



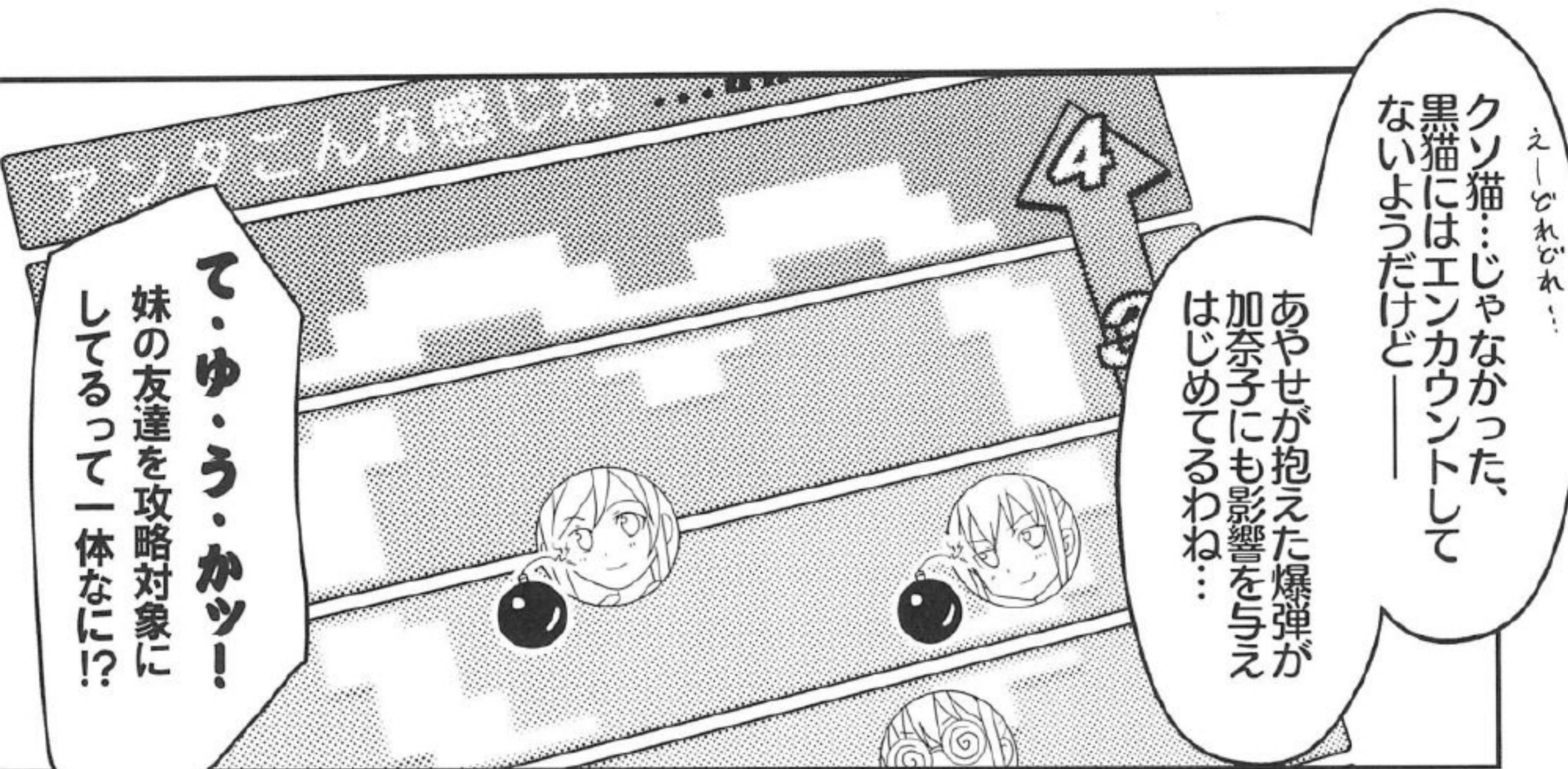
はは…わりイ  
次からは気をつけるぜ

なだこの扱い

んでよ、改めて  
この世界での俺の  
評価を聞きてーんだ

仕事ばいし  
仕方ないか…

ったく…



て・ゆ・う・かつ!  
妹の友達を攻略対象に  
してるって一体なに!?

えーどれどれ...  
クソ猫...じゃなかった、  
黒猫にはエンカウントして  
ないようだけど——  
あやせが抱えた爆弾が  
加奈子にも影響を与え  
はじめてるわね...



な...なんでココまで  
言われなきゃならぬの?!

人の親友をそんな目で見んな!!  
くああアッ! もつマジで超  
キモイキモイキモイキモイ  
キモイキモイツ!!  
プレイヤーとしての才能  
無いんだから早くヤメちゃえ!!  
ヘンタイ! 2回死ねツ!




11のやじじいは  
毎晩続くの?!

どうせ結果なんて見えてるけど  
フラれたらまた来なさいよ  
...どうしてもってゆーんなら  
話くらいは聞いたげるし  
ぼろ...

おわろ。



宵闇がワタシに  
輝けと囁くのよ。



やべーやべー  
黒猫かわいいよ、黒猫  
ゲームがほしくなってきたこの頃  
ここはやっぱり初回版を買うべきなのか・

あさぎしん

## ATO GAK I

### くらは

とくわで、俺妹本でした。  
前の方で、桐乃が可愛くって言ってたけど、  
みんなは黒猫派なんですね！ほんとよ本当！桐乃ちゃんにも構ってあげてくださいよ！  
でも、加奈子ちゃんの方がも～っと好きです。ゆ～るゆるゆるゆるゆるゆるゆ！  
それだけです。お疲れ様でした。

### 菜澄 桂

今回の本はキャラを自分絵に落とし込むことがスゲー難しく、ギックリ腰にも襲われたりと、  
担当ページ数少ない癖に恐ろしく苦勞を強いられた気がします；  
俺妹はそれぞれキャラの反応が色々可愛くて良いですね。京介も格好良いお兄ちゃんだし（\*´-`）  
アニメ観てると桐乃にはらたくつしてしまってますが、でも一番可愛らしいのも桐乃だったような。  
でもボロボロ属性ないので、黒猫のほーが好きかな。でも桐乃の母ちゃんも悪くないと思うんだよね。  
ここって何を書いたら埋まるんだよね。

### みぐ

はじめまして、こんにちは。みぐってします。サークルの雑用をやっています。  
今回は俺妹本ですね。  
あやせが好きだったんですが核地雷級のパンデして、何かしう泣きせうです。  
あと、黒猫も好きです。ちっちゃくて健気で可愛いです。  
泣きぼくろがらあってのもセンスを感じますよね。素敵です。流し目に泣きぼくろ。エロいわあ

## OKUDUKE

\* サークル・発行 \*  
Cute A Hermit & medium passion

\* 発行日 \*  
2011/01/16(第二版)

\* 印刷 \*  
くりえい社

\* 著者 \*  
あさぎしん  
くらは  
菜澄 桂  
みぐ

CuteAHermit <http://cuteahermit.net/>  
無断転載・転用・アップロード・未成年者購読禁止

For ADULT ONLY!



# Photogenic!

『My Little Sister Can't Be This Cute』 Fan Book.  
Although she is very lovely and attractive, she is a nerd.  
2010 winter produced by CuteAHermit and medium passion.